

高元昭紘(たかもと・あきひろ)氏 プロフィール

沖永良部知名町生まれ、奄美市名瀬出身。73歳。ラサール高校、東京大学工学部原子力工学科卒業後、日本原子力発電(株)へ入社。原子力の開発や英国原子力公社との使用済核燃料再処理契約交渉を担当するなど活躍した後、スタンフォード大学経営大学院へ留学、MBA卒業後、BMWJapanのマーケティング部長などを経て、ニュージーランドの大学やオーストラリア教育財団に勤務。1996年から立命館大学経営学部教授(京都)兼新大学設立準備室ディレクター。2000年、大分県別府市に設立された立命館アジア太平洋大学国際経営学部及び大学院教授。2012年より同大学名誉教授兼客員教授。

父親の武さんは奄美大島復帰協議会の副議長を務め、泉芳朗議長の盟友として復帰運動に尽力。本人も復帰の年に奄美小学校6年生で児童会長を務め、復帰祈願の断食などに参加した。

「復帰60年、父の霊前に報告」

復協副議長の次男、高元昭紘さん

奄美群島の日本復帰60周年記念式典・祝賀会が行われた9日、奄美大島日本復帰協議会(復協)の副議長を務め、泉芳朗議長の盟友として復帰運動に尽力した高元昭紘さん(71)が、父親と復帰の思い出などを語った。高元さんは「父の霊前に奄美の復帰60年を報告したい」と感無量の様子だった。

高元武さんは知名町芦清良出身。本土との行政分離期にあった1952年、奄美大島連合教職員組合の専従書記長、復協の副議長に就任。全国各地を回って復帰運動に奔走するが、病魔に侵される。復帰当日(1953年12月25日)は病床にあり、「我、終われり。身体蜂の巣の如し」の言葉を残した。復帰後は県本土の学校に転

勤。病氣と闘いながら、教壇に立ち続けたが、66年、59歳の若さで死去した。



「復帰60周年を父の霊前に報告したい」と語る高元昭紘さん(9日、奄美市名瀬)

昭紘さんは復帰の年は奄美小学校6年生で、児童会長を務めた。「児童代表として式典か祝賀会のどちらかであいさつをした」。昭紘さんは雑誌「少年クラブ」が派遣した本土の少年使節団とも交流した経験がある。

復帰後は鹿児島県のラサール高校から東京大学へ進学。卒業後は原子力の研究開発、長年にわたる海外勤務も経験した。帰国後は立命館大学(京都)で教授を務める傍ら、立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)の開校に尽力した。現在は同大学の名誉教授。

昭紘さんは「奄美が復帰から60年がたったことを父親に報告し、お世話になった人々にお礼を言いたいと考えて、式典に出席することにした。今回の来島は私自身の記憶の確認でもある」と話した後、自身の経験を踏まえ「教育は地域を活性化させる。奄美も大学の設立を真剣に考えてはどうか」と提言した。

南海日日新聞 2013年11月10日